

The Prodigal's Sister 「放蕩息子の妹」

December 9, 2001

Part 2

第二部

老人は階段の近くの梁によりかかって
その弱り果てた目で、彼の夢が叶いつつあるのを見ていた。
そしてハヤネタが、兄の命を獲得するようにと祈った
空の手を上げて微笑んだ。

十年という年月すら、彼女の
自分が兄を連れて帰ってくる手段になるであろうという
決意と望みを砕くことはなかった。
老人は再び柱廊にたち手を振った。
そして彼女が海岸の町ノアシユへの孤独の旅への道に
消えていくのを見守った。

「あれの母親の褐色の美を見事に受け継いだわが娘よ。
あの母親が生きていたら、何をするのか手に取るようにわかる。
私を見て、さ、食事にしましょう、といいながら中にはいり
食事を出し、知らせを待つのだ。
ハイヤが、虚言とう名の大蛇の頭を、かかとで踏み砕き
その報酬に息子に開放したっていう知らせをね。」

老人はたたずんでいた。
ノアシユの町とそこまでの道のりは
ハヤネタに忠告した以上にひどいものであることを
老人はよく知っていた。
日暮れ前までにどこぞのならず者たちが
勇敢で華奢な少女に汚い言葉をかけてくるだろう。
ノアシユへ通じる路は
暴飲暴食するものには畏
心の清いものには悲しみ

五日間彼女は歩いた。夜は礼拝堂で眠った。
ラビ（ユダヤ教宗教指導者）が彼女の素性を疑ったら
礼拝堂の外で眠った。
貧しい家族は彼女をうけいれ、歓迎する。
翌朝彼女は言う「祝福がありますように。
あなた方が私を受け入れてくれたように
私の兄も私を受け入れてくれる日がすぐ来るように
祈ってください。」

そして別れを告げ、冒険を続ける
ついに海路よりノアシュのたどり着くまで。

彫刻のような逆巻く青い波の上の炎のように照り付ける太陽の光が
夕方のもやを突き抜けていく。
まるで煮え立った血色の霧が南北に続く地平線の上を
洪水のように流れていくようだった。
町をよく見ようと、町外れにある丘を登って
ニクヴァの立場になってものを考えてみようとした。
「ニクヴァは果たしてこの丘を登って西を見ようと考えたかしら
そして今、私のこの目の前の感動を感じたかしら。
お父さんの愛が私たちに残した財産の象徴みたい。
この目の前の終わりなき海の逆巻く波のように
風になびく黄金の大麦畑の波のような父の愛
美しい炎のように燃えているその愛
沖に出た後にしくじってしまった船員を決して責めない
ただ、沖に出でなかった者だけを責めるその愛」

日没を見ながら、今晚どこで夜を明かすか考えた。
街に行くか、郊外の農家か。祈りながら考えていると
「父は沢山ある空き部屋を貸すのが好きだわ。きっと
このあたりの農家にも同じような心の広い人が
いるかもしれない」という思いがわきあがってきた。
顔を上げると、丘の中腹の道沿いを
湾曲した杖をもった男と、骨ばった山羊が
畑のほうからゆっくりと歩いてくるのが見えた。
詩篇を口ずさみながら帰路についているらしい。
やつれた顔と、肉のまったくついていないしわくちゃの
皮だけの首。彼女はその男が口ずさんでいる詩篇を
よく知っていた。
黄昏時に、喜びとともに鳥肌がたつような感覚だった。
あの歌を知っているということは
遠い親類か親族にちがいない。でもそれは
財産をすべて失ってしまったであろう兄が
生きていることの兆とは期待はできない。
その歌詞がかすかに聞こえる程度の歌声であった。

杖が折れたとき
判決がくだされたとき
正義は忘れられてはいない

神が沈黙を守っているとは思うな
 たとえ早魘（かんばつ）は厳しくても
 これは主が言われた言葉
 神は弁明するために立つ必要はない
 神の前で弁明しなければならぬのは私たち
 さあ、来て主をあがめよう

「すみません、今夜泊まれる宿を探しています。
 小部屋でも張り出しでもかまいません。毛布はあります。
 屋根があれば十分です。」
 その年寄り彼女の顔を長いこと凝視した。そして
 「こりゃ驚いた。本当に驚いた。
 『驚くだろう』と、言われてはいたが。」
 「だれが言ったんです、驚くだろうって。
 何に驚くんですか？」
 「あんたの父親が言ったんだよ。まったくその通りだ。
 そっくりだよ、あんた。」
 「だれにそっくりなんです？」
 声が震えているのがわかった。
 「あんたの父親と兄貴さ。ほら。そのあご、頬、鼻、髪。驚きさ」
 「おじさま、どの兄のことを言っているの？」
 「そりゃ、あんたが探しにきた兄貴、ニクヴァのことだよ」
 「兄の名前をご存知なの？」
 「あんたの名前も知ってるよ。
 あんたは俺のことを知らないだろうがね。
 ハヤネタっていうんだろ。話はよく聞いてるよ。
 あんたの父親が何度も言ったんだ。
 いつかノアシュに向かうあんたを
 見ることになるだろうってね。
 母親に似たのは見掛けだけじゃないって。
 母親の血筋なんだっていうから、
 父親のもだろうって言ってやったさ」
 「おじ様、今、私は私のことをとてもよく知っているのに
 私はまったく知らない人の前に立っているの。
 おじ様がどなたなのか教えてください。
 そして、兄のところに連れて行ってください。」

「おいで。歩きながら話そう。
 あんたの父親のことは、あんたの兄貴を連れ戻そうと
 初めて探しに来たときから知っとるよ。」

なんとか家に連れて帰ろうとしてな。
拒んだんだ、あの小僧は。
だからあんたの親父は、俺にあいつの様子を見てくれるように懇願したんだよ。金まで置いていったよ。
『あの世行きにならんように』ってな。
あんたの親父と最初に会ってから十年たったんだ。
何度も何度も来て説得しようとした。
こんなところよりも故郷のほうが希望も喜びもあるって見せようとしたんだがな。
あんたの親父様のことはよく知っとるよ。」
「なんとお礼をいったらいいか、わかりません、おじ様。飢饉がどのくらい続いたのか、教えてくださいませんか？
さっきの歌よく知っていますの。
ニクヴァは十分なお金を持っているのかしら？」
「あいつは豚から奪い取ったいなご豆の皮で腹を満たしているのさ。時には小銭と宿泊のために盗みもするがな。」
「今はどこにいるかご存知？」
年寄りの方は三方を壁に囲まれた小屋を指差した。
「あそこさ。あそこでかき集めた枯葉の上に寝て、こうもりと夜を過ごすんだ。
盗人から豚を守り、餌をやる。それがあの宿に住む条件だよ。ここでしばらく待っててやろうか？」
「ありがとうございます、おじ様。本当に助かりました。でも一人で大丈夫。
もう父が二度とおじ様にご迷惑をかけないように祈ります。父の家を訪ねてください。
父の家の扉はいつでも開いていますから。」
「さよなら、お嬢さん。迷惑なんかじゃなかったよ。いつか訪ねるからって親父さんに伝えてくれないかな。」

小屋に向かって足を進めた。
死人のように動かず枯葉の上で寝ている男がいる。
それを眺めながら、まだ息をしているのかといぶかった。
目は閉じたまま。頬はこけてどす黒くなっている。
悪臭がただよっている。つめは汚くどろまみれ。
額には土色の筋ができています。
何ヶ月も洗われていないであろう髪。
見渡す限り、靴はない。裸足だった。
ぼろぼろになった外套は、虫食いの穴だらけ。
眠りながら、手の中の手巾着を握っていた。

昔、父の羊皮紙を保存するのに使っていた巾着だ。
彼の頭のそばにひざまずき、かがんで彼の頬にキスをした。
驚いたことに、かれはそのまま動かさずゆっくり目を開いて
ハヤネタの顔を凝視した。

「誰だ？」

枯葉の上に起き上がった。

「久しぶり、ニック。すっかりやせたわね。」

彼の父親以外、もう何年も、彼のことを
ニックと呼んだ者はいなかった。

彼女の目に涙があふれてくるが見える、そして口を開いた。

「あなたの少女は死人を甦らすって言ったでしょ」

彼の口が驚きで開く「ハヤ？」

「そうよ。迎えに来るって言ったでしょ。他のためでもなんでもない
あなたを連れ戻しにきたのよ。生きたままでね。」

「前見たときは、130センチにもなっていなかったのに。

もう十八になったのか？」

彼女の額にかかった髪の毛を後ろにかいた。

「本当にお前なのか？一人で来たのか？」

「そうよ。」

「馬鹿な。死にたかったのか。この街は地獄だ。

ほめ言葉で若い者を盲目にさせて

そして最後には縛り上げて食っちまうんだよ。」

「私はね、あなたを連れて帰るためにここにいるの。

あなたは、ここにいるべき人じゃないのははっきりとわかっているわね。」

「ああ、泥みたいに『はっきり』とな。ごらん、ハヤ。

俺の心のなかの腐りきったごみが見えないんだよ。

お前はおれがどんな人間なのかわからないんだ。」

「聞いて、お兄さん。

そんなうその言葉は地獄に落ちてしまえばいいのよ。

お兄さん自身よ、自分が誰だかわからないのは。

確かになぞに満ちているわこの街は。

どうやったら、ノアシュのこの傀儡といかさまは
あなたの本来の芸術作品のようにすばらしい本性を
隠すことができたのかしら？

あなたの本当の自分を知っている人が一人いるわ。

たった一人だけ本当のニクヴァを知っている人。

だから、この暗黒の街での火遊びをやめるのよ。

そして、何もなくても光り輝いている

鮮明でまぶしい東の空の明るい空気が

あなた待っている彼のもとに、連れて行ってくれる。
さあ、眠れる人よ、墓穴から起きて出てきなさい。
あなたは息子なの。奴隷じゃないのよ。」

二人は長いこと座って話をした。
彼は、八歳だった彼の少女がこんなに成長し
強くなったのを知って驚いた。
突然彼女は真面目な顔になり、声の調子を変えた。
「お父さんはね、あなたがいなくなってからすぐに
玄関の前に柱廊を建てたの。西向きよ。
何のためかっていうのは明らかだった。
いまだって必ずそこにいるわ、ニック。
消えそうならうそくの炎のような希望でも
彼は捨ててはいないのよ。
一緒に帰りましょう、今夜にでも。
パンがまだ少しあるの。月も明るいし。
夜歩けば涼しいでしょ。昼の間に眠れるわ。
お願いよ。一緒に来て。」
そのとき、彼を束縛していた狂気が
静かに彼の中から去って行ったようだった。
彼女は彼の手をとった。
今までだったら何百回も「否」といい続けてきた彼が
「行こう」と言った。

<呼びかけ>

おいで、揺らいでいる望み、火をともして。
私の話と願望から、消えそうなあなたのろうそくに
また煌々を火をつけて
ろうそくが炎のようになるように
そしてキリストが、あなたのその幸せな炎で
希望を失った言葉をすべて燃やし尽くすように
虚栄の望みの不幸な夢を
明るい生き生きとした空気に
変えてくれるように。
父の農地からふいてくる空気に
あなたが全能の父の偉大な腕を感じ
真実の光の中にひきあげてくれるように
父なる神の光がない限り

私たちは自分が見えなから
自分を知ってると思ったらつづやぐだけ
自分が父に知られているように自分を知るまでは

翻訳：愛咲えみ